

学習院における歴史教育の始まりと標本室

長佐古 美奈子

はじめに

学習院大学史料館は旧制時代歴史地理標本として蒐集された資料を多数収蔵している¹。これらは明治時代から昭和二五年頃まで、その時々々の歴史地理担当教員によって蒐集され、様々な変遷を経て、現在当館に収蔵されているものである。

当館では平成一〇年（一九九八）に『旧制学習院歴史地理標本室移管資料目録』を刊行し、これらの資料を公表した。また「旧制学習院歴史地理標本室移管資料」展（平成一〇年）²、「パオ共和国とその周辺―高松宮殿下からのおくりもの―」展（平成一五年）³、「目白の森のその昔 学習院と考古学」展（平成二二年）⁴、「開学六〇周年記念展示 知識は東アジアの海を渡った―学習院大学コレクションの世界」展（平成二二年）などで一部資料を展示公開した。

また、横浜市歴史博物館「ヤマトとアヅマ」展²、九州国立博物館「海の神々」展³、大阪府立近つ飛鳥博物館「応神天皇の時代」展⁴などに資料貸出を行ってきた。

『旧制学習院歴史地理標本室移管資料目録』刊行以降も調査を継続した結果、学習院歴史地理標本室に関する様々な知見を得ることが出来、さらに学内各所より歴史地理標本室資料を発見し、移管を受け、新たな成果を公表すべき時期に来ていた。

今年度より文部科学省の私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「近代ア

ジアへの眼差しと教育―学習院コレクションの総合的活用」⁵が採択された。この事業の一部として旧制学習院歴史地理標本室資料に関する調査研究成果を発表する。具体的には資料のデジタル化を経て、ホームページ上のバーチャルミュージアムの公開、来年度以降の展覧会、シンポジウムなどを予定しているが、今年度はデジタル化の公表として、旧制学習院歴史地理標本資料中のモノ資料を収録『百聞ハ一見ニ如カズ―旧制学習院歴史地理標本室移管資料』として刊行することとなった。

同紙において、学習院歴史地理標本室資料の来歴解説⁵を記したが紙幅の制限もあり、調査内容をすべて公表することが出来なかったため、場を改め、この紀要紙上で、学習院歴史地理標本が蒐集された経緯を、学習院の歴史教育の流れとともに解き明かしていきたい。

一、東洋史学の嚆矢

日本における東洋史教育発祥の地は学習院であった。

学習院は明治一〇年（一八八七）に華族子女のための教育機関として神田錦町にて開校し、その後、明治一七年より宮内省立となった。

明治二一年（一八八八）第四代院長となった三浦梧楼⁶は学習院の教育改革に着手を始める。様々な改革中、一番の着目すべき点は、従来高等中学校において各学年毎週二時間に過ぎなかった歴史の授業時数を一挙に一四時間に増やし、新たに「東洋諸国歴史」を設けたことである。

この「東洋諸国歴史（東洋史）」は、学習院が日本において初めて設け

た課目であった。明治二三年に東京帝国大学史学科第一回卒業生である白鳥庫吉が学習院教授として招聘され、新設の東洋諸国歴史を担当することとなった。以下は白鳥庫吉が記した『学習院に於ける史学科の沿革』である。少し長くなるが、抜粋を記す。(傍線筆者)

「本文に於て、私は、明治維新後西洋の文物が輸入せられ、学校の教科が西洋の科目に倣つて為されるに至つてから以後の一科目としての歴史が如何に課せられたかを主として述べ、従つて其れに関連して学習院が我国史学界に於て如何なる重大なる役割をもつたか、そして其の内での私一個の私的方面にも及ぶでせう。

私の若い頃には今日のやうな小学校はなくて、私は寺子屋で勉強したのでした。勿論私は寺子屋で歴史を習ひはしませんでした。(中略)

中学に居たのは明治十二年から明治十五年迄でして(中略)中学には未だ歴史科としての独立した科目は存在せず、私達は傍系的に歴史の一端を窺ひ知つたに過ぎなかつたのです。

斯くして中学を了へた私は予備門(今の第一高等学校の前身)に入学して、初めて歴史科なる名称を持つた歴史なるものに遭遇したのでした。併し、假令歴史科とは云へ、正しき意味での歴史と云へば西洋史だけでして、国史東洋史の如きはさらになかつたのです。(中略)東洋の歴史は歴史の数の内にも這入らないといつた有様でした。(中略)

斯くして、西洋史のみの歴史科を了へた私は無事高等学校を卒業して愈々大学に進む事になりました。明治二十年文科大学には始めて歴史科なる独立した科が設けられ、講師として独逸の学士であるルドヴィヒ・リース氏が迎へられて、私は最初の史学科の学生として入学しました。(中略)史学科の講師としてはリース師一人で、然も講義は三年間で近代に及ばず、漸つとフランス革命までやつて、僅かに西洋史の近代を除いた概説を修学して、堂々たる史学専修の学士さまとして社会におし出されたわけです。(中略)在学中支那東洋両史共少しも習ひませんでした。(中略)斯うした社会へ斯うした私が第一回の歴史科卒業生として乗り出したのは明治二十三年七月のことで、同年の八月学習院教授を拝命しました。

当時学習院では、三浦梧棲子が院長として高島信茂氏が次長であられ、学制一般の刷新に着手せられた時でした。(中略)当時修業年限は中等科六年間高等科三年間で、その九年間の教授時間では歴史の講義が最多を占めてゐて、文部省の学校等と較べては全く異色あるものでした。(中略)三浦院長は、「学習院は華族の学校なるが故に、それに適當せる教育を施さねばならぬ。これには歴史が一番である。」とのお考へから、世間では未だ歴史とはどんなものかといふ觀念さへない時代に既に学習院では斯の様に歴史が教授科目の最も重要な地位を占めたのであります。

中等科では国史及び支那史で、六年級になると西洋史が加はります。高等科に於いては、西洋史と東洋諸国の歴史で、担任者は二十二年に就任された市村瓊次郎氏と私の二人で、市村氏は支那史を受持たれ、實際は僅かに西洋史の概説だけ修めた私は最高学府を出たのだから何れの歴史にも精通してゐるだらうと考へられて、中等科で国史及び西洋史、高等科で西洋史及び東洋諸国に於ける歴史といふ難物を背負ひ込まれました。西洋史なら専門だし、国史や支那史なら兎に角教授の見当もつくけれども、東洋諸国歴史では全く手もつきません。(中略)

併し元来「東洋諸国の歴史」といつては、当時知らないのは私達二人だけではないので、世界中何処にもまだ東洋史の研究者はなく、私達が困つてしまつたのは、当時学習院に於て改革案を施すに際し遠く時勢に先んじてゐたからです。東洋諸国の歴史を高等科に置いたことは、卓見と云えば卓見で、實際文部省ではこれより十年後に於いて各学校に東洋史を課した位ですから、その教授者があらう筈はありません。(中略)

今日私が東洋史を以て世に立ち得るのも全く学習院のお蔭であると申さなくてはなりません。(後略)

さらに『学習院百年史』にも同様の記述がある。

「明治二十二年七月二十八日に発布された新学習院学則は種々の点で文部省諸学校のそれとは異なつて居り、全面的に三浦將軍の理想がにじみ出てるのであるが、中でも特色のあるのは歴史の時間が多いといふことであつた。即ち中等学科に於いては日本歴史、支那歴史、歐洲歴史を、高等



図1 明治26年頃の白鳥庫吉(前列中央)と学生達⁽¹⁰⁾

学科に於いては日本歴史、欧洲歴史、米國歴史、東洋諸國の歴史を課す定めになつてをり、歴史を以て人物の陶冶を図る仕組みであつた。(中略)しかも日本歴史、支那歴史、東洋諸國の歴史等を重要視したことは、當時史学科がありながら、僅かに西洋歴史の講義しかなかつた大学と顯著な対照をなすものである。歴史を以て人を陶冶するといふ考へ方、及び國史を尚び、近隣諸國民の歴史を省みるといふやり方は、今日でこそ何等珍らしい方法ではないが、當時に於ては全くの大英断で、誰も思ひつかないことであつた(中略)「東洋諸國の歴史」といふのは即ち今日の東洋歴史に当たるものであるが、その時までにはかういつた歴史は日本はもとより、外国にもなかつた。私は先に述べたやうに西洋歴史こそ修めはしたが、これには全く不案内であつた。ところが一年前に大學を出て同じく学習院に奉職して居られた市村瓊次郎君が、自分は支那史なら出来るが東洋諸國の歴史は教へきれぬ、これは是非君が担当したまへと言ふので、終に私がやることになつたのである。東洋歴史といふものはかゝる事情から生れたものであり、私がこの學問を専攻するに至つた経緯はこゝにあるのである。つまり三浦將軍は我國東洋

史学の生みの親とも言へる訳である。」

従来、「東洋史」学の始まりについては、明治二七年(一八九四)に文部大臣井上毅の諮論を受けて、尋常中学校の各教科の教育について検討がなされ、同年「尋常中学校歴史科ノ要旨」が発表され、科目「東洋史」が設置されたことがその始まりであるといわれてきた⁽¹¹⁾。しかし、「尋常

中学校歴史科ノ要旨」より四年も前から学習院においては東洋史の授業が確立していたのである。

学習院における東洋諸國歴史を含む歴史科目と地理は歴史地理課に配された。地理は「歴史課ニ於テ便宜之ヲ課ス」とあり、歴史課が主に担当することになつていた。その歴史地理課の教材として蒐集されたのが、歴史地理標本である。

二、歴史地理標本室の成立

1. 歴史地理標本の蒐集―大鳥圭介、白鳥庫吉

明治二二年(一八七九)の教育令に基づき文部省は同一四年(一八八一)「小学校教則綱領」を定めた。「小学校教則綱領」は教育課程の近代化を進める上に重要な意義をもつており、教育方法の上にも進歩が見られた。それは「直観(実物)教授法」と呼ばれるものである。直観教授はスイスの教育者ペスタロッチが提唱したもので、具体的な実物やものごとの現象を生徒に直接示したり、触れさせることにより、理解や体験を得られるような指導を行う授業方法である。日本にはアメリカ留学した東京師範学校校長高嶺秀夫によつて伝えられた、この教授法は、東京師範学校附属小学校で研究され、「開発主義教授法」として教育界に普及した⁽¹²⁾。

「小学校教則綱領」の地理では「凡地理ヲ授クルニハ地球儀及地図等ヲ備ヘンコトヲ要ス」とあり、博物では「動物、植物、金石ノ標本等ヲ蒐集センコトヲ要ス」と示されている⁽¹³⁾。さらに明治二四年の「小学校教則大綱」では、蒐集した標本を活用するため「理科ヲ授クルニハ実地ノ觀察ニ基キ若クハ標本模型図画等ヲ示シ」と方法が示されるようになる⁽¹⁴⁾。

学習院の教育規則には実物教授法の記述は見当たらない。しかし明治二四年小学校教則大綱より遙か前、明治二二年の教育令よりも前の明治一〇年に建築された学習院の神田錦町校舍校庭には、巨大な日本列島模型が造作されていた。実物教材の最たるものである。



図2 学習院神田錦町校舎中庭⁽¹⁵⁾

しかし、この神田錦町の校舎は明治一九年（一八八〇）に焼失してしまい、同二年（一八八八）には虎ノ門工部大学校跡に校舎を移転した。この移転に関して⁽¹⁶⁾は、第三代学習院長大鳥圭介が深く関わっている。

大鳥圭介は学習院長となる以前、明治一五年（一八八二）から一八年にかけて工部大学校の校長を務めていた。火事の二か月

後の明治一九年四月一〇日

に院長に就任するや否や、宮内大臣伊藤博文宛てに工部大学校の備品譲渡願いを提出し、結果的に虎ノ門にあった旧工部大学校の校舎と教材、備品類が学習院のものとなった。⁽¹⁸⁾

その中途、明治二〇年（一八八七）には、工部大学校よりの移転に関わる費用や、備品購入費として予算計上したものの余剰を、その他の費用に流用したい旨の願い書が院長大鳥圭介より宮内大臣伊藤博文宛てに提出されている。

【史料一】 ※欄外「永久保存」

「明治二十年 会計決算録」⁽¹⁹⁾（傍線筆者）

第二号

発第三百三八号

一金壹萬貳千六百七拾貳圓拾六銭

内

金壹萬千貳百拾六圓五拾銭

金千貳百六拾五圓

十九年度定額残金

同年度授業料収入

金百九拾圓六拾六銭 同 不用物品払代等雑収入之分
右者十九年度本院受領金之残高及同年度中

授業料収入並雑収入共前記之金額残余相成候ニ付

此際一旦返納可致候処元來該年度ニ於テ此ノ如キ

余剰ヲ生セシ訳ハ昨年二月本院焼失以後一時借入ノ費

舎ナルヲ以テ書籍器械等ヲ始メ日用須要之器具ト雖モ新規

購求之義ハ概シテ相見合置新校落成之時ヲ待テ完全之

器具等可相調積リヲ以テ諸事可及的節縮ヲ加ヘ候ヨリ前

記之残金有之候得共本年中ニハ工科大學跡エ移転之上

ハ学課上必要之書籍器械ハ勿論庁用ニ係ル諸器具ノ如キ

モ一時新調可致分種々有之候ニ付テハ右残金之分ハ額外費

トシテ本年度定額ニ増加支払之義御許可相成度候依

テ別紙額外費予算内訳書相添此段相伺候也

明治二十年四月二十六日 学習院長大鳥圭介

宮内大臣伯爵伊藤博文殿

（朱字） 伺之趣聞届候條其院二十年度経費へ繰越

支出スヘシ

明治二十年五月三十日宮内大臣

朱印

二十年度額外費予算書

一金壹萬貳千六百七拾貳圓拾六銭 額外費

内訳

金三千八百圓

金二千七百圓

金二千三百圓

金三千二百圓

金七十二圓十六銭

理化学用器械

金石動植物学用標本及備品

地理歴史及予備科用標本及備品

英仏獨和漢書籍

生徒並教員用机椅子及庁用椅子新調代

雜費

表1 標本購入予算決算など(明治20年~41年)

	予算	決算	簿冊名	備考
明治20年	1300円	1300円	明治二〇年学習院会計予算決算録	20年度額外費予算書 12672円16銭 内訳 3800円理化学用器械 1600円金石動植物学 用標本及備品 1300円地理歴史及予備科用 標本及備品 2700円英仏獨和漢書籍 3200 円生徒並び教員用机椅子及び庁用椅子新調 代 72円16銭雑費
明治21年		600円	明治二一年学習院会計予算決算録	21年度経費追加予算書1400円 地理歴史予 備科標本及び備品600円
明治31年	200円		明治三十一年学習院会計予算決算録	
		25円	三十一年度学習院収支予算前年度比較増減説明書	
明治32年	200円		三十二年度学習院収支予算書	
明治33年		300円	三十三年会計予算決算録	
明治34年	100円		三十四年度学習院収支予算書	
		18円85銭	三十四年度学習院収支決算書	
明治35年		3円25銭	三十五年度学習院収支決算書	
明治36年		100円	三十六年予算決算録	
		101円60銭	三十六年度学習院収支決算書	
		50円	三十七年予算決算録	
明治37年			三十七年度学習院収支予算前年度比較増減説明書	
		89円82銭	三十七年度学習院収支決算書	
			三十七年度学習院収支予算前年度比較増減説明書	
明治38年		153円94銭	三十八年度学習院収支決算書	
明治39年	250円		三十九年度学習院収支予算書	『重要雑録』教授白鳥庫吉満韓地方へ旅行二 付キ歴史地理上参考品ノ蒐集ヲ囑託並手当 金給与方稟申ノ件 従来諸般ノ設備頗ル不 完全ニシテ将来ニ於テハ教授上ニ要スル図 書、器械、標本、教場用具等ノ為メニ多額ノ 増額ヲ要ス
		246円6銭5厘	三十九年度学習院収支決算書	
			四十年会計予算決算録	高等学科ニ属スル経費増額之儀ニ付上申
明治40年	650円		四十年年度学習院収支予算書	
			四十年年度学習院収支予算前年度比較増減説明書	地理歴史標本200個 500円
		309円4銭	四十年年度学習院収支決算書	
明治41年	1200円		四十一年度学習院収支予算書	(目白へ移転)
		550円増	四十一年度学習院収支予算前年度比較増減説明書	

※簿冊は全て学習院アーカイブズ所蔵

この費用中には「地理歴史及予備科用標本及備品」があることから、明治二〇年段階で、地理歴史の標本が備えられようとしていたことが裏付けられる。しかもその予算は一三〇〇円という莫大なものであった。

大鳥圭介の尽力により虎ノ門旧工部大学校校舎に移転することになった学習院であるが、大鳥圭介はその移転完了を見ずに明治二一年(一八八八)七月に辞任し、同十一月三浦梧楼が第四代学習院長に就任した。

三浦院長は旧工部大学校校舎を「鳩小屋のようだ」と評し、このような校舎では学生達の教育に良い影響を及ぼさないと判断、直ちに新たな校舎の模索に入った。それとともに冒頭に述べたような各種学制の改革にも着手したのである。

三浦院長の熱望がかない、明治二三年(一八九〇)学習院四谷校舎が完成した。新築された校舎の平面図には「博物室」がみえる。しかし「歴史地理標本室」は図面上には見当たらない。

表1は『学習院収支予算書』『学習院収支決算書』などから標本購入予算決算及び歴史地理標本関係の記述を書き抜いたものである。

明治二〇年の一三〇〇円、翌二一年の六〇〇円以降は特に大きな支出はない。次に予算額が大きくなるのは明治三九年(一九〇六)のことである。この年には学習院の歴史地理課にとって大きな出来事があった。

この年、文部省と陸軍が共同で企画した学生「満韓旅行」に、本院からも三島弥彦²⁰が学生が参加し、

白鳥庫吉もその引率として満韓に赴いた。その際に標本を蒐集しているの
である。

明治三十九年の『重要雜録』²²には「教授白鳥庫吉滿韓地方へ旅行ニ付キ歴
史地理上参考品ノ蒐集ヲ囑託並手当金給与方稟申ノ件」として白鳥が滿州
朝鮮地方にて歴史地理上参考品を蒐集する用務一件についての稟議が掲載
されている。

【史料二】 ※欄外 永久保存

『重要雜録』

立案明治三十九年七月十日 決裁明治三十九年七月十一日 主事 書記

院長 會計課長 (朱字)

発第一八七号 宮内大臣へ稟申案

学習院教授 白鳥庫吉

右ハ今回滿韓地方へ旅行ノ儀御聴許

相成候ニ付テハ此機ヲ以テ本院教課上ノ

必要ヲ充テシ為滿韓地方歴史上参考品

ノ蒐集ヲ囑託致度就テハ其手当トシテ

金壹百五拾円給与致候儀御認可相成度

此段稟申候也

明治三十九年七月十一日 院長

.....

院長 主事 (朱字)

庫吉儀

歴史地理研究ニ資スルノ目的ヲ以テ滿

韓地方ノ風土文物取調ノ為本月十二

日出発九月十日帰京ノ予定ニテ同地

方へ旅行致度候間御許可相成度

此段奉願候也

明治三十九年七月九日

学習院教授文学博士白鳥庫吉印

宮内大臣子爵田中光頭殿

(朱字) 宮内省内事課 乙第八七号

願之趣聴許ス

明治三十九年七月十日 宮内大臣之印

(朱字) 宮内省内事課 丙第四三三号

※欄外主事 會計課長

学習院受

七月十一日
第一五二号

本月十一日発第二八七号附稟申御院教授

白鳥庫吉へ手当金給与ノ件御申立之

通決裁相成候條此段及御通牒候也

明治三十九年七月十一日

内事課長心得近藤久敬

学習院長山口銳之助殿

.....

立案明治三十九年七月十六日 決裁明治三十九年七月十一日

主事 書記 (朱字)

院長 會計課長

宮内大臣へ稟申案

本院教授白鳥庫吉滿韓地方へ旅行御聴許

相成候ニ付其機ヲ以テ同地方歴史上参考品ノ蒐集

ヲ囑託シ其手当トシテ金百五拾円給与ノ件去ル十一日御

決裁ヲ得候処各金額ニテハ不足ニ候間五拾円増

加給与候儀御認可相成度此段可申上候也

明治三十九年七月十一日

院長

.....

(朱字) 宮内省内事課 丙第四三九号 ※欄外主事 會計課長

本月十六日発第三〇八号附稟申御院教授白鳥庫吉へ満韓地方歴史上参考品蒐集手当金五拾円増加給与之儀御申立之通決裁相成候條此段及御通牒候也

明治三十九年七月十七日

内事課長心得近藤久敬

学習院長山口鏡之助殿

学習院受

七月十八日

第一六一号

立案明治三十九年七月九日

主事 書記

(朱字)

院長

辞令案

学習院教授文学博士白鳥庫吉

満韓地方歴史上参考品ノ蒐集ヲ囑託ス

明治三十九年七月十一日

学習院

白鳥は宮内大臣より合計二〇〇円の予算を得て、学習院長より「満韓地方歴史上参考品ノ蒐集」の命を受け、歴史標本の蒐集に出かけたのである。そして、この時の様子が『輔仁会雑誌』「満韓旅行記念号」に記されている。⁽²³⁾「二十九日 白鳥先生は兼ねてより教場の内外折にふれ時に当たりに余等に語られし鴨緑江の一支流冬佳江(ママ)の上流地方に有る高麗の廣開土王の事跡を刻める石碑を発掘運搬する計画熟したりとて此に一行と別れ単独入韓の途に就かれ余等は七時奉天を發し鉄嶺指して進行し南北に袖を分かちたり」

では、この時に白鳥が蒐集した標本とは何であったのか―その標本の一つはおそらく「広開土王碑拓本」であろう。現在も学習院大学東洋文



図3 「太王陵出土太王陵銘条磚」

化研究所に収蔵されているこの拓本(甲乙二種…乙は明治二八年(一八九五)前後、甲は明治三六年(一九〇三)頃(一九一二)については、以前より白鳥の蒐集に係るもの、と推測されてはいたが、今回の調査において甲拓本は期的にみても白鳥蒐集の可能性が高まった。現在史料館に収蔵されている旧制学習院歴史地理標本室移管資料中の「太王陵出土太王陵銘条磚」もこの時同時に蒐集されたものであろう。

学習院アーカイブズ所蔵の『寄贈品取扱簿』⁽²⁴⁾甲には大正四年七月から大正一五年までの間に学習院が寄贈を受けた物品が記載されている。その中には大正七年五月二三日「土器 朝鮮 六個 白鳥庫吉」という記載がある。現在歴史地理標本室移管資料中、来歴の不明な「黄釉電文磚片」、「緑釉唐草文磚片」、「黄釉丸瓦片」、「施釉熨斗瓦」、「珠文縁重弁十六葉蓮華文軒丸瓦片」なども白鳥が蒐集した可能性も捨てきれない。

しかし、後述するように歴史地理の標本室は関東大震災において焼失する。多少の標本類は救い出せたようであるが、巨大な紙製品である拓本が焼け残ったのは如何なる理由であろうか―明治三一年より大正三年まで歴史地理課長を務めた白鳥庫吉は、同時に明治三八年より図書館長も勤めた。おそらく拓本を始めとする幾つかの標本類は白鳥庫吉の手元(標本室以外の教官室か図書館長室)に置いてあったのであろう。

石田幹之助著「白鳥先生の追憶」⁽²⁵⁾によれば、白鳥は研究室内の自分の近辺に本や参考史料を隙間なく雑然と置いてあり、必要に応じてそこから取り出し、学生に教授していたという。また白鳥は参考資料は広く買い集めることを旨とし、「何しろ白鳥先生は本屋の倉ぐるみ買ふやうな景気のい

い買ひつぷり²⁹⁾で」購入していたという。前記の予算増加願いはこのような白鳥の蒐集方針を裏付けるものになろう。

2. 歴史地理標本室の成立―目白校地

この標本蒐集は、白鳥の満韓地方旅行引率の序に行われたのであろうか。この年の「二十九年³⁰⁾度学習院収支予算前年度比較増減説明書」には

五、従来諸般ノ設備頗ル不完全ニシテ将来ニ於テハ教授上ニ要スル図書、器械、標本、教場用具等ノ為メニ多額ノ増額ヲ要スとある。

この時期、各地の高等師範学校においては、直観（実物）教授法に基づいて「歴史標本室」が相次いで設立されているのである。学習院は明治二三年（一八九〇）に四谷に校地を移したが、前述のように四谷校舎においては「博物」標本室の存在は確認できるが、「歴史地理」の標本室は部屋としては確認できない。目白校地への移転（明治四一年）を間近に控え、目白キャンパス内に「歴史地理標本室」を設置することが具体化したのが、この時期なのではないか。そしてその具体化に尽力したのは歴史地理課主任の白鳥庫吉であったのであろう。「頗ル不完全」な施設を整備し、その中には満韓地方で蒐集した実物を取りそろえ、教授しようと計画したと考えられる。

「歴史地理標本室」は、目白移転に際し漸く設置された。『学習院明治四十年会計予算決算録』には「地理歴史標本二〇〇個」を購入したとの記録があることから、目白校地移転に伴い設置された歴史地理の標本室には、白鳥庫吉が満韓地方で蒐集した標本等と共に、明治三九年度より順次新たに購入した標本類が収蔵されたことが推測される。

3. 乃木院長の自決と歴史地理標本室

大正元年（一九一一年）、学習院にとって衝撃的な事件がおこった。第一〇代院長乃木希典の自決である。乃木院長は院長官舎ではなく、学生寄宿舍の事務棟「総寮部」に起居し、学生と寢食を共にするなど、学習院学



図4 「刀銘信濃守藤原弘包」 その拵「黒塗太刀拵」

生を愛した³⁵⁾。乃木の遺族からは、その学習院へ乃木遺愛の品が数多く贈られた。そのうちの「刀銘信濃守藤原弘包」その拵「黒塗太刀拵」などは歴史地理標本室に収蔵し、保存していくことを決定したことが『雑件録 大正二年』にて確認される。しかし、『標本原簿』によればこれらの遺物は関東大震災以前より「図書課預かり」となっており、そのため焼失を免れ、現在に至っている。

【史料三】

『雑件録 大正二年』

立案 大正二年二月十四日

決裁 大正二年三月二十六日

庶務課長 ㊦ 書記 ㊦

院長 ㊦ 会計課長 ㊦ 監務課長 ㊦ 図書課長 ㊦ 総寮長事務取扱 ㊦

地理歴史主任 ㊦

伺

故乃木学習院長御遺物ノ保管方ヲ左ノ通定メ夫々ヘ達セラレ可然乎

故乃木学習院長御遺物

一、御紋章銀製花盛器

一、御紋章七宝花瓶

一、李花御紋入銀製花瓶

右三品ハ倉庫ニ納メ置キ卒業式等

ノ場合ニ用ヒル事

一、青石

此ハ他日記念樹ノ標石ニ用ヒル事
(中略)

一、御紋章入三ツ組銀盃

一、同銀盃

一、同陶盃

一、同三ツ組木盃

一、同木盃

一、同銀製煙草入

一、黒色少尉軍衣及袴

一、同小將軍衣

一、同中將軍衣

一、同大將正衣

一、同將官長袴

一、黒塗太刀

一、鮫鞘短刀

一、矢ノ根石(八重箱入)

一、古代土器

右ハ歴史課ノ保管トス院長在世中ノ奇贈品ト共ニ一纏メト為シ歴史標本室ニ保存スヘキ事

壺個

壺対

壺対

壺個

壺組

壺個

十六個

五組

八個

壺個

各三枚

一枚

一枚

一枚

一枚

一振

一振

一組

二個

大正二年三月四日 学習院

なお、乃木自決後空席となった学習院長は白鳥庫吉が「院長事務取扱」となり代行した。

4. 関東大震災と歴史地理標本の再蒐集

大正四年(一九一五)大正天皇即位を記念し作成された『大礼奉獻学習院写真』³⁸⁾には歴史地理標本の写真が掲載され、白鳥庫吉らが蒐集したであろう「満洲土人器具」などが姿を見せている。

しかし、大正一二年(一九二三)九月一日の関東大震災で、学習院は教材や標本に甚大な被害を蒙り、ここに写る標本類は現残しない。

『学習院時報』³⁹⁾によれば、博物標本はほぼ全焼し、歴史地理標本は一部焼失を免れたが、救い出されたものはわずかだった。このため、各方面から教材等の資料を緊急蒐集することとなった。以下『雑件録』大正一三年『寄贈品取扱簿 甲』などよりその経緯を辿る。

まず、標本類を再蒐集するために第一四代院長福原謙⁴⁰⁾は、震災直後の九月六日に同じ宮内省所管の帝室博物館⁴¹⁾に早速博物学教授飯田謙二⁴²⁾を派遣し、助力を依頼している。翌年には改めて、

宮内大臣へ上申案

「大正十三年七月一七日院長

昨年九月一日震災ニ依リ

焼失セル本院ノ博物標本類復

旧ニ関シ帝室博物館所蔵品中

本院ニ於テ必要ナル標本類ハ

此際本院ニ保管転換相成候様

致度此段上申候也」

との依頼を出している。

帝室博物館は長年、動・植・



図5 「地理歴史標本」

鉱物標本を主とする天産部関係資料の譲渡先を模索していた。大正一三年八月一六日には帝室博物館総長大島義脩より学習院長宛に「当館天産部出品ヲ文部省へ引渡ノ件ハ進捗致シ候間貴院ニ於テ御希望ノ列品ハ此ノ際至急其ノ品名御申越相成度候也」との照会が来ている。これに対し学習院長は「亜米利加猿」など一〇点と陳列箱の保管転換願いを回答した。最終的には記録上三〇四〇点の標本が学習院へ保管転換されている。なお、この時期の帝室博物館総長大島義脩は初代女子学習院長を務めた後に帝室博物館総長に異動し、着任三日後に関東大震災に遭遇した。

また、当時海軍兵学校在学中だった高松宮宣仁親王は同年一〇月二〇日に母校学習院を慰問し、すぐさま掛図、絵葉書帖など八四件を寄贈した。資料は学内の博物学科・歴史地理学科等に配分されて、石鏃一件・日本内外の写真帖三〇冊・歴史地理関係絵葉書帖一一冊・歴史掛図及び掛台一二三件・各種製品標本三件・各種模型三二件等が歴史地理標本室に収蔵された。

翌一三年の夏期休暇中には、改めて板澤武雄⁴⁶ら教員達が各地へ派遣され、標本類の再蒐集に努めている。同一年七月二五日には「今般本院教授板

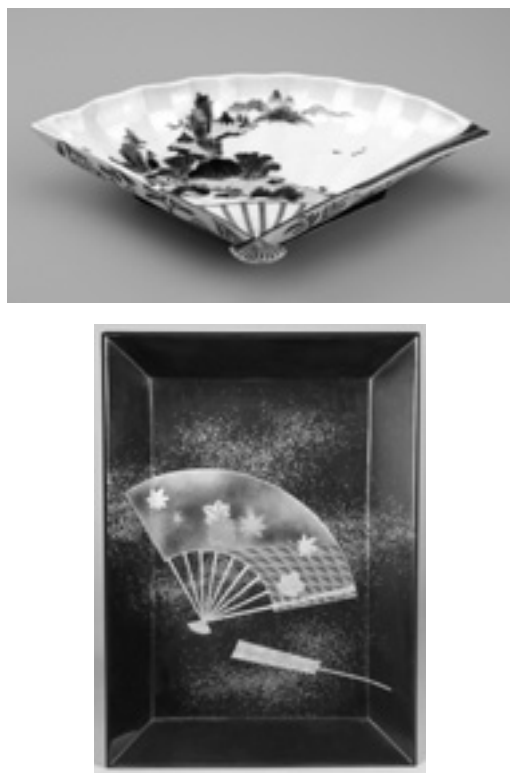


図6「色絵山水文扇形皿」(上)「扇面時絵長方盆」(下)

沢武雄ヲ歴史地理標本蒐集ノ為来ル月日頃貴県下ニ出張致サセ候ニ付到着ノ上ハ万事可然御配慮被成下度御依頼申上候」と学習院長名で、新潟、富山、石川、福井、鳥取、島根各県知事への依頼文が出された。例えば「色絵山水文扇形皿 初代徳田八十吉 九谷焼」「扇面時絵長方盆 象彦」などはこの時に購入したものである。

板澤武雄は人類学者伊能嘉矩⁴⁸に育てられた。大正五年(一九一六)に東京帝国大学に入学し、国史学を専攻した。卒業後は大谷勝真⁴⁹に誘われて同一〇年に学習院講師となる。学習院教授になった直後に、関東大震災が発生したのである。

博物学の飯田謙二教授も博物標本蒐集のために日本石油東山鉱業所、柏崎製油所、岐阜県神岡鉱山、石川県尾小屋鉱山などへ出向いている。

また島津製作所からは大量の標本を購入した。島津製作所は、現在精密機器や医療機器などの理化学系の器材製作会社として著名であるが、明治八年(一八七五)、初代島津源蔵が京都で理化学機械の製造業をはじめたことから事業を発した。開業地が京都舎密局に程近かったこともあり、様々な実験器具や学校教育用器具を開発した。

同二八年、製作所内に「標本部」が新たに設けられた。標本部の設置は初代源蔵の念願したものであったということであるが、直観(実物)教授法と関係することは時期的にみても明らかである。現在も残る標本部の製品目録を見ると、「初等教育博物学標本」や「鉱物岩石及び地質学用標本器具」、「地理及歴史学用標本及模型」など多岐に亘って製造している。

島津製作所標本は、近年各所で存在が明らかになってきており、今後調査研究が進むものと思われる。

さらに、明倫中学校付属博物館の標本の移管も受けた。明倫中学校付属博物館は明治三四年(一九〇一)に設置された尾張徳川家の私立中学校の付属博物館である。この博物館は同二四年創立の「愛知教育博物館」を母体とした日本最初の私立博物館である。

大正七年(一九一八)に、明倫中学校は徳川家から愛知県に所管変更となった。これに伴い同一三年に校地を徳川家に返還することになっていた

が、博物館分は移転代替地を得ることが出来ず、閉館が決定した。そこで同一四年、学習院は愛知県へ博物館資料移管の依頼状を送付し、すぐに許可を得た。なお明倫博物館については、橋本佐保氏の論考「学習院と「明倫中学校付属博物館」―旧制学習院歴史地理標本室移管資料を中心に」を参照されたい。

その他、南洋庁や北海道庁にも寄贈依頼書を出し、馬鈴薯や、羊毛、バターなどの寄贈を受けている（その後廃棄）。

同一二年一〇月から同一三年二月までに前述の『寄贈品取扱簿 甲』に表れる寄贈品は一九一件にのぼる。この中には石田幹之助⁵⁴⁾よりの「満洲及支那各地絵葉書」三四五枚なども含まれる。東洋文庫の運営に力を尽した石田幹之助は白鳥庫吉の門下であり、また板澤武雄の大学の先輩にあたる。おそらく、板澤より標本焼失・蒐集の話聞き、手元にある絵葉書を寄贈したのであろう。

関東大震災により白鳥庫吉などが尽力し、蒐集した貴重な標本類が焼失したことは、大変不幸ではあったが、一九二四年前後という時間を切り取った各地の標本が再蒐集されたことは、貴重なコレクション形成ができた、ということでもある。

5. 新歴史地理標本室の設置

昭和五年（一九三〇）、新しい歴史地理標本室が設置された。場所は中等科教場、現在の大学西一号館である。宮内省内匠寮技師権藤要吉設計の鉄筋コンクリート造りの美しい建物が竣工し、その三階に歴史地理標本室は再興されたのである。図7の平面図⁵⁵⁾にある通り、中等科教場には「幻燈室」があり、幻燈を使用した授業も行われていた。大谷勝真は外国書籍をガラス乾板に撮影し、投影する授業を行った。いまもそのガラス乾板が旧制学習院歴史地理標本室移管資料中に保存されている。

昭和五年には昭和天皇大礼の際に使用された「東帯（奏任官用緋袍）」なども宮内省より保管転換された。『大礼録二二三 引継ノ部』⁵⁷⁾には、昭和四年（一九二九）五月三〇日に、内閣・恩賜京都博物館・遊就館・徴古館

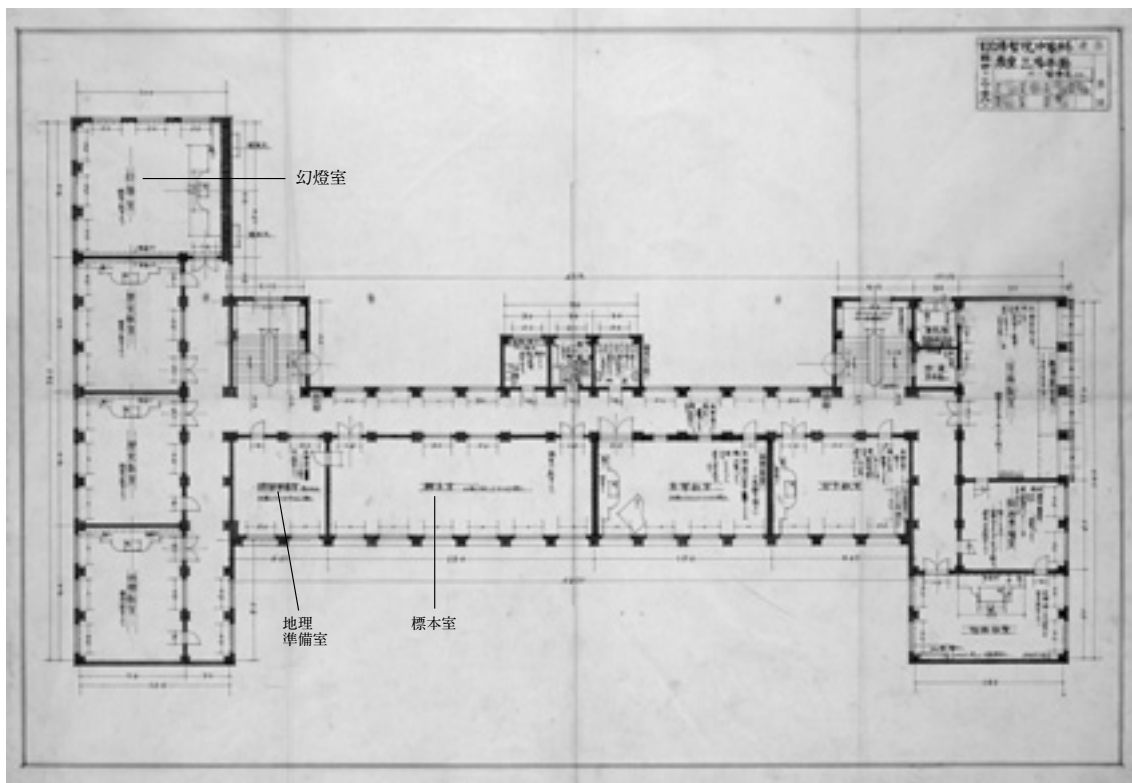


図7 中等科教場三階平面図

に対して宮内省大臣官房用度課から装束類が送付されたことが確認される。しかしこの中には当時宮内省の管轄下にあった学習院への装束類の保管転換についての記述は見られないが同月二〇日付で学習院にも装束類が保管転換された。おそらく同じ宮内省内のやりとりであったため、送付記録が残らなかったのであろう。

さらに同一一年には再び高松宮より「パラオ諸島アバイ模型」などが寄贈された。

同一六年学習院の校地を喜多見（現世田谷区成城）へ移転する話が持ち上がった。移転先は宮内省御料地であったため、帝室博物館内藤政光の指導のもと輔仁会学習院史学会により発掘調査が実施され、その出土品である鉄刀・鉄剣なども収藏品となった。

その他、『標本原簿』にあらわれる寄贈者は浅野長武（紺紙銀泥華嚴経断簡（二月堂焼経）寄贈）や若王子文健（工部大学校所用ジュエール洋瓦寄贈）などがある。また江藤濤雄、矢島透など古物商からも資料を購入している。

6. 歴史地理標本室の終焉と史料館

昭和二〇年（一九四五）八月の敗戦により学習院は存続の危機にたたされた。その後同二二年、私立学校として新たな出発をすることとなり、二四年には学習院大学が開設された。中等科教場は大学文政学部が使用することとなり、歴史地理標本室は閉鎖され、標本類は図書館（現北別館・史料館）へと移動した。二二年より学習院教授となった末松保和はその後図書館長となり、昭和二七年の東洋文化研究所の開設にも尽力した。当時学生であった岡田茂弘によれば、末松は白鳥庫吉と同様、図書館長室にお気に入りの標本類を置いていた。また、西一号館を大学文政学部が使用するようになった後も、しばらくの間、歴史地理標本準備室はそのまま使用が続けられ、掛図などの教材や、史学部学生による発掘品などは準備室におかれていたという。

歴史地理標本室が閉鎖された後の昭和二五年（一九五〇）、児玉幸多は



図8 「束帯（奏任官用緋袍）」

教材として「古代土器複製標本」を購入している。⁽⁶⁵⁾

昭和三九年（一九六四）、前川國男設計の新図書館が竣工した。図書館長室も一部の標本類と共に新図書館へ移動した。掛図、絵葉書、書籍、写真など紙資料も新図書館の収藏品となった。末松館長の意向か、「束帯（奏任官用緋袍）」や「マーシャル諸島武器」も新図書館へ移動している。乃木院長の遺品は新図書館四階に「乃木室」が出来、一括して保存されることになった。しかし、大部分の標本類はそのまま旧図書館（現北別館）に残された。

昭和五〇年（一九七五）末松保和が退職した。この時になって始めて「広開土王碑拓本」は図書館に登録され、「刀銘信濃守藤原弘包」と「スナイドル銃」などは学習院総務課へ移管され、鉄砲刀剣類所持等取締法登記された。

同年、児玉幸多の尽力により史学科史料室を引き継ぎ、史料館が開館した。史料館の場所は旧図書館（現北別館）である。その後図書館から束帯などを、東洋文化研究所からは、末松が使用していた机の中に保管されていた紺紙銀泥華嚴経断簡（二月堂焼経）などを、総務課から銃を、と三十余年の間、徐々に学内各所より歴史地理標本室標本の移管を受け、歴史地理標本室が、史料館にて再構築されたのである。

三、学習院に残る標本と今後の展開

学習院には歴史地理標本室の他に、博物学標本室も存在していた。この

博物館標本室も関東大震災で焼失するが、帝室博物館天産部標本、明倫博物館標本、樺太植物標本（久邇宮、高松宮下賜）、などの寄贈を受け、再構築された。昭和二年（一九二七）には理科特別教場（現南一号館⁶⁷）を竣工し、博物館標本を陳列している。現在、それらの標本は学習院高等科標本保管室に移管されているが、その収蔵点数は数千点にのぼる。

その理科特別教場であった南一号館は、長年大学理学部が使用してきたが、平成二三年（二〇一〇）南七号館へ移転するにあたり、多くの理科実験器具が南一号館に遺された。特に建物に建築当初より備付けられていたドラフトチャンバーなどは、科学史上特筆すべきものである。南一号館改装後もこれらの科学遺産は保存され、公開されることとなった。

学習院初等科にも数多くの標本が保管されており、そのいくつかは平成二四年度学習院大学史料館特別展「近代日本の学びの風景―学校文化の源流」展⁶⁸にて展示公開をした。

今回、歴史地理標本室標本のうちモノ資料を図録として刊行したが、当時もっとも活用されていたであろう「掛図」や「写真」、「絵葉書」などの資料群については、調査途上である。一部は学習院大学東洋文化研究所ホームページ上で公開しているが、⁶⁹全容を明らかにするまでには至っていない。今後、「近代アジアへの眼差しと教育―学習院コレクションの総合的活用」プロジェクトにおいて引き続き調査とデジタル化をすすめる。

前述の通り、明治末期から大正初期、各地の高等師範学校においては、直観（実物）教授に基づいて「歴史標本室」が相次いで設立されていることが、今回の調査において判明した。現在その標本群はどのようになっているのか。お茶の水女子大学、奈良女子大学、京都教育大学など一部と連携の兆しが見えて来ているが、今後の広がりが多いに期待される。

さらに、明治二〇年代から第二次世界大戦敗戦までの「歴史地理」教育の在り方―ある意味帝国主義的な「眼差し」―によって蒐集された標本類は、内国勸業博覧会などの各種博覧会出品作とも共通するものがあると推測される。その比較なども今後の課題としたい。

名前	明治										大正										昭和																							
	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
市村環次郎 21.12											41.12																																	
白鳥庫吉	23.8																				10.4																							
大森金五郎											31.8										[5.11~7.11休職] 8.6																							
瀬川秀雄											32.9										5.3																							
真崎誠											35.9										2.5																							
堀竹雄											41.3										[7.6~休職] 9.6																							
白石正邦											[41.4~女学部]										4.1 9.1																							
池内宏											3.6										5.8																							
大谷勝真											5.8										15.3																							
牧野純一											5.11										7.9																							
池田俊彦											6.5										5.4																							
遠藤金英											7.4										8.3																							
長寿吉											8.12										14.2																							
今井鑄											9.7										10.12																							
橋本捨次郎											9.9										[11.7~休職] 13.7																							
板澤武雄											10.3										13.3																							
石山乾二											14.8										[13.4~休職] 15.3																							
白鳥清											15.4										21.3																							
出石誠彦											5.8										12.9																							
清水二郎											5.12										21.0																							
村松繁樹											7.3										24.3																							
児玉幸多											13.4										55.3																							

※本表は旧制学習院中・高等科歴史・地理課教員の在職期間をグラフで示したものである。教員名は『学習院一覽』（学習院アーカイブズ所蔵）より挙げ、在職期間は「教職員カード」（学習院アーカイブズ所蔵）による。雇用の開始・退職の年月は棒グラフの始めと終わりに記した。休職期間および学習院女学部在職期間は〔 〕で示した。

【附】 歴史地理科教員一覽 戸矢浩子（学習院大学 RA）作成

本稿は文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業研究プロジェクト「近代アジアへの眼差しと教育―学習院コレクションの総合的活用」による研究成果の一部である。

本稿執筆にあたり、研究代表者大澤顯浩教授をはじめとするプロジェクトに参加されている皆様に御教示を賜わり、御協力を得ました。史料の閲覧に関しては学習院アーカイブズ桑尾光太郎氏に大変お世話になりました。同プロジェクトによる『百聞ハ一見ニ如カズ―旧制学習院歴史地理標本室移管資料』に御執筆いただいた方々にも多くの知見を賜りました。特に岡田茂弘先生には、平成一〇年の『旧制学習院歴史地理標本室移管資料目録』刊行のための調査段階から今日に至るまで、様々な御指導、御教示を賜っております。ここに記して感謝いたします。

註

- (1) 写真、紙史料などの整理が未了であるため、現時点では総点数は不明である。
- (2) 「ヤマトとアヅマー武具からみるヤマト王権と東国」展（平成一六年一〇月九日～一二月二八日 横浜市歴史博物館）へ御嶽山古墳出土遺物を貸出。
- (3) 「海の神々―捧げられた宝物」展（平成一八年一〇月八日～一二月二六日 九州国立博物館）へパラオ島アバイ模型、カヌー模型、海図を貸出。
- (4) 「応神天皇の時代」展（平成一八年九月三〇日～一二月二六日 大阪府立近つ飛鳥博物館）へ伝応神天皇陵出土水鳥埴輪を貸出。
- (5) 「百聞ハ一見ニ如カズ―学習院歴史地理標本室来歴」〔百聞ハ一見ニ如カズ―旧制学習院歴史地理標本室移管資料〕学習院大学史料館編 二〇一三
- (6) 明治二二年一月五日～明治二五年三月二六日在職。

(7) 明治二三年八月～大正一〇年四月在職。

(8) 『学習院輔仁会雑誌』第二三四号 学習院輔仁会 一九二八（『白鳥庫吉全集』第一〇巻 岩波書店 一九七二）

(9) 『学習院百年史』第一巻（学校法人学習院 一九八二）

(10) 学習院アーカイブズ提供。

(11) 茨木智志「一八九四年の「尋常中学校歴史科ノ要旨」に対する再検討―その歴史教育史的意義と提唱された「世界史」教育を中心に―」〔総合歴史教育〕三七 総合歴史教育研究会 二〇〇一

(12) 文部科学省ホームページより

開発主義教授法の代表的著作は「改正教授術」（三巻・明治十六年）であり、東京師範学校助教諭若林虎三郎と同校附属小学校訓導白井毅によって編集されたものである。この書の序文には、ペスタロッチの教育方法に基づくものであるとし、これによって生徒の「心性開発」の方法について数年間実地の経験を積み重ねて研究した結果であると述べている。この書には「教授の主義」として、「活潑ハ児童ノ天性ナリ。動作ニ慣レシメヨ。手ヲ習練セシメヨ。」・「五官ヨリ始メヨ。児童ノ発見シ得ル所ノモノハ決シテ之ヲ説明スベカラズ。」・「己知ヨリ未知ニ進メ。一物ヨリ一般ニ及べ。有形ヨリ無形ニ進メ。易ヨリ難ニ及べ。近ヨリ遠ニ及べ。簡ヨリ繁ニ進メ。」など九つの教授原理が掲げられている。この原理に続いて教授案の様式、授業批評の要点などを示し、また各教科の教授方法を例をあげて説明している。その後続編（明治十七年）も出版されている。また高嶺秀夫がジョホノット(J. J. Johnson)の著を訳した「教育新論」(明治十八年)も出版された。開発主義教授法の思想に基づく教科書も多数出版された。「改正教授術」の著者若林虎三郎の編集した「小学読本」(五巻・明治十七年)、「地理小学」(二巻・明治十六年)などがそれである。

(13) 『明治十四年法令全書』(内閣官報局、一八九〇年 近代デジタルライブラリー)

(14) 小学校教則大綱(抄)(明治二十四年十一月十七日文部省令第十一号)

(文部科学省ホームページより)

- (15) 学習院アーカイブズ所蔵。
- (16) 明治一九年四月一〇日～明治二十一年七月二三日在職。
- (17) 大鳥圭介と工部大学校については『明治の視覚革命』(学習院大学史料館平成三三年度特別展図録)に詳しい。
- (18) 鎌田純子「史料紹介 学習院神田錦町時代の焼失教材」(『学習院大学史料館紀要』第一八号 二〇一二年)
- (19) 学習院アーカイブズ所蔵。なお史料中の※印は予備情報として筆者が追加した。また改行は史料通りとした。以下同。
- (20) 学習院アーカイブズ所蔵。
- (21) 明治二五年～四〇年在学。
- (22) 学習院アーカイブズ所蔵。
- (23) 明治三九年発行。
- (24) 『知識は東アジアの海を渡ったー学習院大学コレクションの世界』(学習院大学東洋文化研究所編 丸善プラネット 二〇一〇)
- (25) 学習院アーカイブズ所蔵。
- (26) 明治三二年歴史地理課長～明治三六年歴史地理課主任～明治四三年地理歴史学課主任と役職名の変遷がある。
- (27) 白鳥が図書館長を務めた時代の図書館は、明治四二年建築の現在史料館が使用している建物(北別館)、登録文化財である。
- (28) 『石田幹之助著作集4 東洋文庫の生まれるまで』(六興出版 一九八六)
- (29) 二四に同じ。
- (30) 学習院アーカイブズ所蔵。
- (31) 村上由佳「標本から資料へー奈良女子高等師範学校蒐集歴史標本に込められた意味とその変容ー」『奈良女子高等師範学校教育における標本―教育に占める「直観」の位置』(奈良女子大学大学院G P実践スキルゼミナール古文書調査実習 平成二二～二三年度)
- (32) 『学習院時報 第三号』大正一二年 学習院アーカイブズ所蔵による。
- (33) 学習院アーカイブズ所蔵。
- (34) 明治四〇年一月三十一日～大正元年九月一三日在職。
- (35) 総寮部の乃木が起居した部分は、現在も「乃木館」として学習院目白キャンパス内に保存されている。登録文化財。
- (36) 学習院アーカイブズ所蔵。
- (37) 『標本原簿』とは歴史地理標本室の資料台帳である。「歴史」と「地理」の二冊があり、「歴史」は大正二年(一九一三)から昭和一九年(一九四四)に、「地理」は大正二年(一九一三)から昭和一九年(一九三九)に収蔵した資料が一部記載されている。『標本原簿』には、受入番号や資料名、受入年月日、寄贈者名や購入価格等が記載されている。
- (38) 大正四年 学習院。
- (39) 注(31)に同じ。
- (40) 学習院アーカイブズ所蔵。
- (41) 大正一二年一月三日～昭和四年一月二八日在職。
- (42) 明治一〇年(一八七七)華族会館により開校した学習院は、同一七年宮内省所管となった。同六年に開館した博物館(同三三年に帝室博物館と改称)は同二二年宮内省図書寮の付属になり、学習院と同じ宮内省所管となった。
- (43) 明治三九年～昭和二〇年在任。
- (44) これらの標本(約三〇〇点)と陳列箱は現在学習院高等科標本保管室に収蔵されている。
- (45) 明治四四年～大正六年在学。
- (46) 大正一〇年～昭和一三年在任。
- (47) 注(40)に同じ。
- (48) 明治―大正時代の歴史学者、人類学者。慶応三年五月九日生まれ。坪井正五郎に師事。明治二八年台湾総督府雇員となり、地誌、民俗などを調査。その研究は没後「台湾文化志」などにまとめられ、台湾研究の資料となった(『講談社日本人名事典』

講談社（二〇〇一）。

(49) 大正五年～一五年在任。

(50) 板澤自身が歴史地理標本室へ寄贈した資料として朝鮮・台湾の民族資料が数点含まれている。これらの寄贈年代は明らかではない。しかし大正一四年に父親代わりの伊能が亡くなり、この時に板澤が伊能旧蔵の民族資料を台北帝國大学に寄贈していることから、恐らく学習院にある朝鮮・台湾民族資料も同時期に寄贈したのではないかと推測される。

(51) 注(40)に同じ。

(52) 筆者は国立臺灣大学校史館において台北帝國大学時代に収集された島津製作所教材を実見している。

(53) 愛知教育博物館は愛知医学校教授奈良坂源一郎が会長を務める「浪越博物会」が設立した私立博物館で、実物実業について研究・公開することを目的とし、約一五〇〇点にも及ぶ動植物の標本を所蔵していた。明倫中学校附属施設となった後も、県内小学校の修学旅行の見学地として利用されるなど、広く公開・活用された。

(54) 東洋史学者。モリソン文庫(現東洋文庫)の運営につくす。国学院大、日本大学教授。

(55) 現在の西一号館三〇六・三〇七・三〇八教室。西一号館は登録文化財。

(56) 施設部寄託。

(57) 宮内庁書陵部宮内公文書館所蔵。

(58) 明治三六年～大正五年在学。

(59) 学習院内の教師と学生による活動組織。

(60) 明治三四年～大正五年在学、元東京国立博物館長。

(61) 明治三三年～二九年在学。

(62) 昭和二年～五〇年在任。

(63) 昭和二年～二七年在学。

(64) 昭和一三年～昭和五五年在職。学習院大学教授、学習院大学文学部史学科主任、学習院女子短期大学学長を経て、学習院大学学長を務

める。

(65) ドルメン教材については平田健「学校教育における考古資料教材の開発とその学史的意義―ドルメン教材研究所『古代土器複製標本』の評価をめぐって―」(『学習院大学史料館紀要』一七号 二〇一一)に大変詳細な分析がなされている。

(66) 平成元年(一九八九)図書館改築工事時に廃棄予定であった「奏任官東帯」「南洋の槍」「地球儀」を保管転換し、史料館収蔵品とした。

(67) 現南一号館。登録文化財。

(68) 平成二四年一月一日～二月一日開催。

(69) 学習院東洋文化研究所東アジア額バーチャルミュージアムアジアの肖像―学習院大学所蔵古写真。

http://www.gakushuin.ac.jp/univ/rioc/vm/c05_koshashin/index.html